

児童が「読めた」と自覚する読みの指導

ービーバーの大工事の授業を通してー

東広島市立高屋東小学校 木本豊子

1 研究テーマについて

(1) 学習指導要領で示された読みの力

小学校学習指導要領解説国語編で示されている低学年の読むことの目標は、「書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせる」である。説明的な文章に限定すれば、順序に気付かせることをねらっている。次に指導事項では、説明的な文章の解釈について、「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」と書いてある。また、「解釈は、本や文章に書かれた内容を理解し意味付けることである。具体的には、内容や表現を想像、分析、比較、対照、推論などによって相互に関連付けて読んでいく。文章の内容や構造を理解したり、その文章の特徴を把握したり、書き手の意図を推論したりしながら、読み手は自分の目的や意図に応じて考えをまとめたり深めたりしていくこと。」と説明している。さらに、自分の考えの形成及び交流に関する指導事項を読むと、「文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと」とも書いてある。

このように指導内容に関連付けながら見ていくと、内容の大体を読むことと書いてありながら、また一方で、文章の中の大事になる言葉や文などを適切に抜き出すことができることも書いてある。大事なことと大事ではないことを取捨選択するためには、文章全体を理解していなくてはならない。これらのことを総合的に考えると、低学年においても非常に高度な読みの力が求められていることが分かる。

(2) 他教科等と比較することで見えてきたこと

論理的思考をする時、比較することで課題を明確にすることがある。小学校の教師、特に低学年の担任は、全教科の授業を行っている。そこで、いろいろな教科等と比較することによって、これまでの私の国語の授業で改善すべきところが見えてきた。テーマに関わっていくつか挙げてみると次のようになる。

① 児童に「学習の見通し」を持たせる

算数科の授業は、毎時間、課題提示→見通しを持たせる→自力解決→集団解決→まとめといった流れで行われることが多い。見通しを持たせる時に、既習事項を振り返り活用を促す。見通しが甘ければ自力解決に至らず、見通しに時間をかけ過ぎると問題を解く意欲が半減する。見通しの持たせ方が難しく、とても重要なのである。

国語科においても同じことが言えると考え、見通し」という考えが明確ではなかったように思われる。本時で何をするのか、それはどのようにして行われ、それをするにどのような価値があるのかを児童に理解させる必要がある。すでに読むことが好きな児童なら問題はないが、読むことに自信がない児童にとっては、特に意欲面を引き出すと共に、どうすればできるのか、既習事項の何が使えるのかなどを具体的に示す必要がある。

② 目標を明確にする

指導案等で書いてきた本時の目標を国語科と算数科で比較してみる。国語科は、「登場人物の様子や気持ちを読み取る。」「ビーバーがダムを作る様子を読み取る。」「見たり聞いたりしたことをメモに書く。」などで、算数科では、「基準量のいくつ分という倍の意味を理解し、何倍の大きさを式で表すことができる。」「6の段の九九を知り、正しく唱えることができる。」「長さの加法、減法を適用する問題を解決することができる。」などである。国語科の目標が活動的表現であるのに対して、算数は、その時間に何ができれば良いのか目標が明確である。それは評価との関係があり、指導要録の観点を比べてみると次のようになる。国語科は「関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」、「言語についての知識・理解・技能」で、算数科は「関心・意欲・態度」、「数学的な考え方」、「表現・処理」、「知識・理解」である。

学習指導要領で指導領域が「表現」「理解」「言語事項」の2領域1事項から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の3領域1事項に改められた平成11年の改定では、児童自体の言語活動を活発にすることが求められた。今回の改訂の趣旨でも、児童主体の言語活動を重視しようとしている考えは変わっていない。そのこともあって目標が活動目標的になるのかもしれないが、見落としてはならないことが国語科の目標そのものにある。国語科の目標の冒頭に『国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成する』と明記されている。言語活動を通して、表現力と思考力を育成するのである。そこで、活動目標と学習目標がしっかりとリンクするように単元目標や本時の目標を設定する必要がある。

(3) 読みを自覚すること

同じ教室の中で同じ授業を受けていても、読みの力は違ってくる。読む力を付けた児童は、わずかな隙間の時間も本の世界にいる。周囲に影響を受けることなく、読書することができる。そのような児童は、推理小説を読む時のように結末を楽しみにしながら、はじめから順を追って読んでいくことができる。しかし、少し長い文章になると内容を読み取ることができない児童もいる。それは学期末のテストの結果を見るとよく分かる。授業で学習していない初めての文章の読解では、初めの部分だけ読んで、間はとばしている。全体を読まず、挿絵を手がかりに想像して答えを書いている。問題文すらよく読んでいない。説明的文章の構成には、頭括型や尾括型、双括型などがあるが、読んでいる文章が尾括型の文章の場合、最後まで読まなくては結局何が書いてあるのか分からない。書いてある内容が分からなければ、児童は読めたとは思わない。アンケートで児童に「読み取り」について問うことがあるが、児童はどのようにして自分の「読み取り」を評価しているのだろうか。児童が読み取れたと思うのは、「できた」とか「わかった」と感じた時であろう。

2 研究の仮説及び検証の視点

(1) 研究の仮説

説明的文章教材を結論から読むことで見通しを持たせ、読みを視覚的に書き換える学習をすれば、児童は論理的思考を働かせて文章から大事なことを適切に読み取り、自分の読みを自覚することで読む力をつけることができるであろう。

(2) 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
順序を読み取ることができたか 視覚化する活動A 視覚化する活動B	① 説明書に書き換えたものを分析する ② 広告に表現したものを分析する
自分が読めたと自覚できたか	① アンケート ② 初発の感想と授業後の感想の比較

3 実践の概要

(1) 単元名 ビーバーの大工事のひみつを知ろう 教材「ビーバーの大工事」(東京書籍2年下)

(2) 単元の目標

- 順序に気をつけて読むことができる。
- 大切なことを落とさずに読むことができる。

(3) 手だて

- ① 結論の部分から学習することで見通しを持たせる。
- ② ダム作りの説明書を書かせることで順序をとらえさせる。
- ③ 巣の広告を書かせることで全体から大事なことを読み取らせる。

(4) 学習計画 (全8時間)

- ① 初発の感想を書く。(1時間)
- ② 結論の部分を読み、大まかに全体をつかむ。(1時間)
- ③ ダム作りの説明書を書いて順序をとらえる。(2時間)
- ④ 巣の広告を書いて大事なことを読み取る。(2時間)
- ⑤ 広告の交流をする。(1時間)
- ⑥ 感想を書く。(1時間)

(5) 授業の様子

① 初発の感想について

初発の感想を読んでもみると、児童の80%は、文章の「つかみ」とも言える最初の部分について書いていた。ビーバーが鋭い歯を持ち、大きな木を切り倒すところである。また40%の児童は、その他にもビーバーの特性である水かきのある後足や水の中で長くもぐることができることについても取り上げていた。さらに35%の児童は、巣やダムのことにも触れていた。

これらのことから、初めて読むときは、文章の初めの部分には大変興味を持つが、文章全体までは意識が向いていないことが分かる。

② 結論部分の読みについて

初発の感想を書いた後、説明文の最終段落の二箇所を括弧にしたワークシートを配り、括弧に入る言葉を書かせた。「ビーバーが(①)を作るのは、それで川の水をせき止めてみずうみをつくり、そのみずうみの中に、ときにおそわれないあんぜんな(②)を作るためなのです。」結果は、②の正答率が100%であった。一方①の正答率は20%であり、『ダム』と書くところを『す』と書いていた。

この説明文は題からも分かるように、ビーバーは安全な巣を作るために、はじめに大がかりなダム作りをする。ダム作りについて説明している部分が膨大であるにもかかわらず、児童の意識がダムに向いていないことがわかった。話し合いをする中で、それで川の水をせき止めるという表現に着目することで、①にダムが入ることを確認した。この学習で、これからビーバーがダムや巣を作ることについて書いてある文章を読んでいくという読みの見通しを持たせた。

③ ダム作りの説明書を書いて順序を捉えることについて

【読みの力を視覚的に表現するA】

活動目標「説明書を書こう」

難波博孝(2006)は、単元設計をするにあたって、活動目標について次のように述べている。「教材から考えて、子どもが意欲がわくような、そしてできるだけリアルな場が設定できそうな活動目標を立ててみましょう。ここが一番肝心でしかも難しいところです。(途中略)さらに、それぞれの活動のステップを達成するために必要な学習目標を考えるのです。ただ、この学習目標の設定には、教材にとって重要で、かつ、子どもが活動を遂行するのに欠かせないものが、学習目標となるのです。」

本時でつけたい力(学習目標)は、ダム作りの順序を読み取ることである。ダム作りについて知らない児童がダム作りの説明書を書くためには、教材をしっかり読まなければならない。そこで教材を読む必然性が生まれる。ダム作りの順序に関係ある叙述を抜き出し、自分の考えを潜って新たな文章に書き換えていく。これまでに児童は、おもちゃを組み立てることなどで説明書を読むことは経験している。

「説明書には、何が書かれているか。」と問うと、準備物・説明・注意事項・図・記号・番号などが児童から出された。それらを確認したうえで、ビーバーについて知らない人が読んでも分かるように「ビーバーのダム作り説明書」を書かせた。(資料1)

④ 巣の広告を書いて大事なことを読み取ることについて

【読みの力を視覚的に表現するB】

活動目標「広告をつくろう」

文章から大切なところを抜き出すという学習がある。低学年の読むことの指導事項にも明記されていることは前述の通りである。では、大切なことは誰にとって大切なことなのだろうか。自分にとって？ ビーバーにとって？ 筆者にとって？ これもまた、学習指導要領の解説には、必要に応じて大切なことを読み取る力とある。

低学年の目標からすれば、順序を捉えるために大切なところであるから、安全な巣を作るためにまずダムが作られるということを読み取らせたい。ダム作り→巣作りという順序である。このような順序になるのは、突き詰めれば、『安全性』の確保に他ならない。あえてこの授業で、低学年でよく行われる「クイズ作り」を活動目標にしなかったのは、クイズは自分にとって大切なことが取り上げられることが多い。広告を作ることを活動目標にすれば、この説明文の根幹となる『安全性』、言い換えれば、ダム作りをすることで安全な巣を作ることができるという順序を読み取らせることができると考えたからである。なぜなら、広告は広く良さ（売り）を知らせるものだからである。この説明文に書かれたビーバーの巣の売りは安全性であるから、広告には安全に関するキャッチコピーが書かれるはずである。（資料2）

⑤ 広告の交流について

広告につけた見出しについて出し合った。出された見出しのキーワードは「安全」「丈夫」「エコ」「自然」というものであった。キーワードが分かれるのは、誰にとって大事かのとらえが違うからである。

「安全」は全体が読んでいる。「丈夫」は部分を読んでいる。「エコ」「自然」は自分の経験から情報を選び出している。低学年の児童にとっては、まだ必要ではないかもしれないが、筆者はどれが一番大事だと考えているのだろうか？と発問してみると、はじめは、それぞれ出されたキーワードについて自分なりの理由を述べていたが、次第に「安全」にまとまってきた。主な意見は、教材分の最終段落に書かれていることを根拠にしていた。筆者を意識することで、文章全体を読もうとしていることが分かる。

4 分析と考察

① 大事なことを読み取ることができているか

(ア) ダム作りの説明書から順序が読み取れているか。

「ダム作りの説明書」ルーブリックと児童の実態

	内容	具体的な記述	児童の割合
A	文章全体からダム作りについての説明の叙述を抜き出し、順序良く書いている。	①木を切る ②木を川のそこにさしこむ ③その上に小えだをつみ上げる ④石でおもしろをする ⑤どろでかためる ⑥川岸から川岸までのびて、川の水をせき止める	30%
B	川の中で行われる作業を順序良くよく書いている。	①木を川のそこにさしこむ ②その上に小えだをつみ上げる ③石でおもしろをする ④どろでかためる	59%
C	ダムと巣を混同していたりダム作りとは関係ないことを書いていたりする。	AB以外	11%

児童は、ビーバーが水の中で、材料の木、小枝、石、どろでダムを作る様子についてはよく読み取っている。しかし、ダム作りは、材料の木を切るところから始まるが、文章の全体がつかめていない児童は、木を切った

り川の水をせき止めて初めて完成したりするところまでは取り上げられていない。ここからも、大事なところを抜き出すためには、全体が読めていなければならないことが分かる。また、『ダム＝湖』というイメージを持っていることが考えられ、堰として理解していないため、一方の川岸から反対側の川岸にのびてやがて川をせき止めるという表現に着目できなかつたのではないかと考えられる。「ダムの説明書」についての全体交流をしなかつたため、B基準からA基準へ読みを高める学習ができていないことに課題が残る。C児童に対する手だてとして、「説明書」には何が書かれているか確認をしたときに、「気をつけること」という項目が児童から挙げられ板書した。そのことが説明書の必要事項として意識に残り、実際文章には書かれていなくても、無理に自分の考えとして不必要なことまで書き入れたと考えられる。そこで、活動に入る前や途中で、何と何を書けば良いか個別指導する必要があった。

(イ) 巢の広告から順序を読み取ることができているか

「巢の広告」ルーブリックと児童の実態

	内容	具体的な記述	児童の割合
A	「安全性」を確保するためにダム作りという大工事をすることを関連付けて読み取っている。	①湖の真ん中に巣を作る ②入り口が水の中にある ③泳ぎの上手な動物でないと巣に入ることはできない	60%
B	「安全性」を確保するために巢の工夫がされていることを読み取っている。	①泳ぎの上手な動物でないと巣に入ることはできない	20%
C	「安全性」について書いていない。	AB以外	20%

前活動「ダム作りの説明書」に比べると、A基準の児童の割合が増えている。「巢の広告」は、ビーバーが安全な巣を作るためにダムを作ることまで読み取るには、有効な活動だったと言える。しかし、同時にC基準の児童の割合も倍になっている。このことから、読み取りの力の格差が広がったと捉えることができる。C基準の児童の広告について詳しく見ていくと、安全性については読み取れているようであるが、ダムを作ることやビーバーの優れた体の特徴など、すべてを含めて広告に書こうとしており、教師の意図とは違う児童の思考の流れが見えた。低学年の発達段階として、読み取ったことを羅列したと考える。また、現在は「エコ」を推奨する社会になっているため、教材を含めてあらゆるものを環境を守る観点で見ている児童がいることが分かった。

③ 児童は読む力を獲得したか

(ア) 児童は「読めた」と意識しているか (アンケートの結果から)

単元が終わり、児童にいくつかアンケートをとった。その中で、「ビーバーの大工事で書かれていることが読めましたか」という質問に対して、『読めた』が93%、『普通』が7%で、『読めなかった』と回答した児童はいなかった。なぜそう思うのか理由を見てみると、「説明書や広告にまとめるために全部読んだから」、「書くために何回も読んだから」、「読書では分からなかったことが授業の中で分かった」など、自己評価が高かった。低学年の児童は、メタ認知できる発達段階ではないにしても、評価の観点である「関心・意欲・態度」につい

て、教材文の内容や表現に関心を持ち、何度も読みながら説明書や広告を最後まで書き上げたことは十分に高い評価ができるのではないだろうか。

(イ) 初発と事後の感想の比較から

人を理解するときの順序として、第一印象から始まり、その人物と話したり関わったりするうちに、理解が確かになるということがある。それと同じように、読みも印象的な読みから指導過程を経ることで確かな読みへと深まっていくと考え、初発と事後の感想を比較することにした。

初発と事後の感想比較

	北アメリカ		歯		大きな木を切る		後ろ足		尾		家族		長くもぐれる		体のつくり		木と石とどろ		夕方から夜		ダムでせき止める		ダムの長さ		湖の真ん中に架		巣の入り口		安全な巣		その他			
	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後	初発	事後				
1			○																													○		
2					○																										○			
3			○			○														○												○		
4				○	○						○		○	○											○							○		
5			○		○				○			○	○	○		○		○							○							○		
6			○																○													○		
7						○				○									○		○		○											
8																																	○	
9			○								○	○		○											○								○	
10			○		○																			○		○		○						
11			○	○						○				○											○								○	
12	○		○											○											○		○							
13										○				○					○					○		○								
14	○										○													○										
15					○																											○		言語
16			○	○	○		○	○		○														○										
17	○		○	○																													○	
18			○				○						○																				○	
19			○				○																									○		
20						○							○	○					○														○	
21						○				○			○																			○		
22			○										○	○						○		○											○	
23			○	○									○	○											○								○	
24					○			○					○	○											○				○	○				
25			○			○							○	○						○				○										
26					○		○				○							○						○	○								○	
27					○								○	○																			○	
28				○			○				○		○	○										○								○		
3	3	0	15	6	9	3	7	2	1	4	5	3	10	14	0	1	1	5	1	3	0	6	1	11	0	3	0	2	5	16				

初発の感想に文章の冒頭に書かれていた「北アメリカ」を取り上げている三名は、共に読むことに苦手意識を持つ児童である。音読を聞いていると、たどたどしくて読み間違いも多い。教師から感想を書くように言われ、ビーバーの生息地に興味を持ったのであろうが、とりあえずはじめに書いてあることを書いたとも考えられる。しかし、三名共に、事後の感想では文章の後半部分に書かれているダムや巣のことについて取り上げて

おり、全体を読むことで関心が内容の中心に向かったと考えられる。また三名に限らず、初発の感想では、多くの児童が文章のつかみの部分と言える「のみのような鋭い歯」について取り上げていたが、事後では、ダム作りや巣作りについて書いていた。この説明文の要旨は最後に書いてあるにしても、かわいい動物としてイメージを持つビーバーが、大きな木を切り倒すという意外性をはじめに書くことで読者を惹きつけている表現の工夫に学ぶところが多かったと言える。

また、初発の感想では、「水かきがあるのがすごいです。」のように部分を単独で取り上げていたが、事後では、「水かきのある後ろ足とオールのような尾があるから泳ぎがうまいです。」のように部分と部分を関連付けて感想を書いている児童が増えていた。

わずか1名ではあるが、『それで』とか『ためなのです』など大事な言葉がわかりました。」のように、内容面の感想ではなく、言葉の働きについて感想を書いている児童がいたことから、内容を理解するだけでなく、どのように書いているのかなど表現への関心が表れてきていることが分かる。

5 研究の成果と課題

○二つの活動目標を設定して連続で取り組んだことは、児童にとって楽しく、力がつく学びとなった。

○読みが表現され、「説明書」と「広告」が書けたことで、児童は達成感を持つことができた。

○「説明書」と「広告」を書くために、児童は長文を何度も読み、全体を読むことができた。

○文章の後ろから読んだことで児童は全体を見通して読むことができた。

●児童の作品を評価する評価基準表が授業前に完成しておらず、形成的評価ができなかったため、課題を残したまま単元を終える結果となった。また、評価基準を複数の教師で作っていないため、妥当性に課題が残る。今後、評価基準の見直しをしていく必要がある。

●児童の発達段階にあった活動目標の設定を考えていく必要がある。今回の実践で成果はあったが、目標と内容を欲張り過ぎていると思われる。今後、児童の発達段階やそれに応じた指導の系統性について研究したい。

●C児童の作品を見ると、隣接の児童の作品と類似している。読むことが苦手な児童にとって活動を支えるために友だちの力が必要であることが分かる。教科指導も席などの教室環境や友だち関係など学級経営が大きく影響することを考えておくことが大事である。

6 おわりに

ビーバーの大工事の単元を終え、いつものように市販テストを行ったときのことである。テストの裏面に、「関心・意欲・態度」を評価する問いがあった。問いは、『「ビーバーの大工事」を読んで分かったことをもとに、ビーバーのひみつについてのクイズを二つ作ってみましょう。』である。授業ではクイズ作りをしていなかったため、少し戸惑いを見せる児童もいたが、殆どの児童はクイズを二つ作っていた。自分が興味を持ったことや驚いたことを取り上げたクイズが多く作られていたが、その中に「筆者はビーバーの大工事は何を一番伝えたかったのでしょうか。」「ダム作りと巣作りでは、どちらが大事なのでしょう。」のようなクイズがあった。これらの問いは、私が授業で児童に投げかけた発問である。

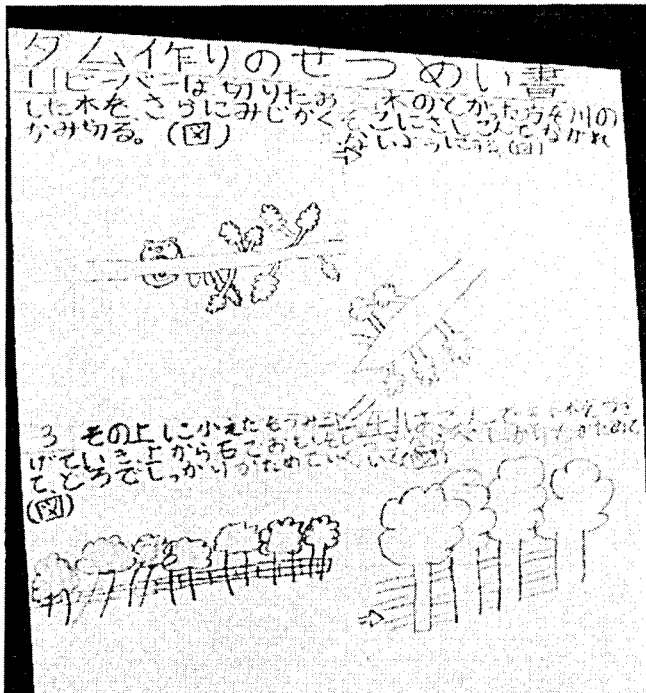
指導案を書くとき、教師はまず児童の実態を書く。アンケートを取ったり日ごろの授業の様子を思い出したりしながら課題を挙げていく。「～を苦手とする児童が○%いる。」「～の力が十分についていない。」「自分の考えを説明することが十分できるとは言えない」などできない実態が並ぶ。しかし、その子どもたちを教えているのは私である。児童が作ったクイズに答えを出すためには、教師も学び続けるしかない。

参考文献

- 秋田喜代美 能智正博 (2007) 『事例から学ぶ はじめての質的研究法 教育・学習編』 東京図書株式会社
難波博孝 (2006) 『楽しく論理力が育つ国語科授業づくり』 明治図書
西岡加名恵 (2008) 『学向き設計で確かな学力を保障する』 明治図書
文部科学省 (平成20年) 『小学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社

資料1

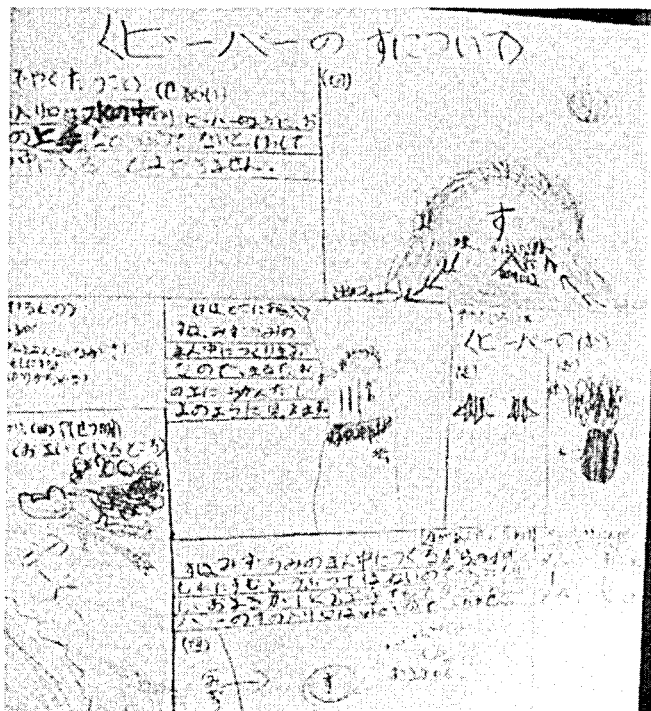
「ダム作りの説明書」



川の中の作業について順序良く書いているB基準の児童の作品

資料2

「ビーパーの巣の広告」



「安全性」を確保するために、ダム作りという大工事をするを読み取っているA基準の児童の作品